ハイヌウェレ型神話考

「ハイヌウェレ型神話」とは、インドネシア東部のセラム島に伝わる神話の主人公の名にちなみ、死体から栽培植物が生える神話の総称として、ドイツの民俗学者イェンゼンが名付けた呼称である。
ハイヌウェレの神話の概要は、以下の通り。
あるところに、ココヤシの花とアメタという男の血から生じたハイヌウェレという少女がいた。奇妙なことに彼女は中国製の皿や銅鑼などの宝物を排泄したため、アメタは金持ちになった。しかし村人は彼女を気持ち悪がり、祭りの晩に生き埋めにした上、踏み殺してしまった。アメタはハイヌウェレの死体を掘り起こし、切り刻んで、祭りの広場のあちこちに植えた。するとそれまでまだ地上になかったヤムイモやタロイモが生じて、以降村人の主食となった。

これに似た話が日本の記紀神話でも語られている。

古事記におけるオオゲツヒメの神話は、以下の通り。
スサノオが彼のために食事の準備をするオオゲツヒメを覗き見ると、彼女は鼻や口、尻から様々な食材を取り出して調理していた。その様子が汚らしいと激怒したスサノオは、オオゲツヒメを斬り殺した。するとその頭からは蚕、目から稲、耳から粟、鼻から小豆、陰部から麦、尻から大豆が生じた。

一方日本書紀では、同様の女神をウケモチノカミという名の神が担っている。
ツクヨミがアマテラスに命じられて食べ物を司るウケモチノカミを訪ねると、彼女は陸を向いて米飯を吐き出し、海を向いて魚を吐き出し、山を向いて獣を吐き出し、それらでツクヨミをもてなした。その様子が汚いと激怒したツクヨミは、ウケモチノカミを斬り殺した。すると死体の頭から牛馬、額から粟、眉から蚕、腹から稲、陰部から麦、大豆、小豆が生じた。

いずれも生前から貴重品や食物を吐き出したり排泄していた女の神が、気持ち悪がられたり汚いことをする者として惨殺された後も、遺体から植物を生じさせる神話である。記紀神話ではハイヌウェレ神話のように遺体を切り刻んで埋めるという行為は認められないが、この遺体損壊の記述を読んだときに、決まって身体の一部を損失した状態で出土する縄文の土偶を想起した。これらの土偶の殆どは乳房を有した女性形であり、もしかしたら何らかのハイヌウェレ型神話を踏襲する祭祀やまじないのなかで擬似的に殺され、切り刻まれて、埋められたのではなかろうか。
本図は、そのような考えから女性の身体に縄文土器から取ってアレンジした刺青を配し、ハイヌウェレ神話や記紀神話にある栽培植物を生じさせたものである。

チェレン

インドネシアのジャワ島にはジャティラン（Jathilan）と呼ばれる民俗芸能がある。ジャワ更紗を取り込んだ色鮮やかな衣装に、濃い化粧をして猪や馬の絵を持った男女、大きな布にすっぽりと実を隠して、頭上に龍の面を掲げた人たちが現れ、スピーカーから大音量で流される生演奏のガムランと歌謡曲に合わせて踊る。彼らは次第に好き勝手に踊りだし、お供えになだれこんで動物のように果物を食らったり、蛍光灯を咥えて割ったり、ときには観客に襲いかかったりする（そのためなのか、或いは結界なのか、ジャティランの踊り場はいつも柵で囲われ、観客と隔てられている）。その場を制御し、秩序をもたらす役を担うのは、お守りと鞭を持ち、イスラムの聖句を唱えるパワンと呼ばれる呪術師だ。
このジャティランにおいて、踊り手はトランスしているとされる。私は最初彼らが本当にトランスしているのか気にしていたが、いろいろな団体の公演を見たり、パワンや踊り手から話を聞くうちに、どうでもよくなった。ジャティランは、踊り手があの大音量のガムランと歌い手の煽り声に乗せられて、仲間や観客の目の前で各々の役に変身して見せ、その生身を以て人間の内外にある、生々しいなにかを遊ばせる場のように思われた。そのような非日常の場が、たとえば日頃は建材の支柱をつくっている職人などの市民によって、週末や祝日のたびに、積極的にどこかの村につくられるのだ。
私も、論理的思考や堅実さが求められる作業の外からくる、生々しく抑えがたい感情の発現を欲するときがある。子供の頃はそういったものを自由に描き出せていた気がするが、いつの間にかそれが難しくなってしまった。ジャワのジャティランを描くことは、再び絵のなかで化け、遊べるようになるための、大きなヒントになっているように思う。

パンデミック

新型コロナウィルスによるパンデミック下での生活が始まって、一年以上が過ぎた。地震や台風などの災害は絶えず発生するものだが、今回のパンデミックの特異性は、なんといっても全世界が同時にその危機にさらされる点にあるだろう。
NHK の特集によれば、コロナウィルスは、人間が自然に手を加えることによって、自然界から人間界へやってくる機会が増すという。たとえば、東南アジアではヤシ畑開墾のための節度のない原生林の破壊が問題になって久しいが、そうした焼畑などの行為が野生動物の生息域を狭めた結果、人間との接触機会が増え、病原菌が交換される。また、地球温暖化によって永久凍土が溶けることによって、古代のウィルスが解放されるともいう。従って、人間が環境問題に対して取る行動が変わらなければ、今回のようなパンデミックが起きる頻度は、今後上がっていくと考えられるというのだ。
新型コロナウィルスは人間が活発に行動すれば行動するほど猛威を振るう。このグローバル化が進んだ時代に、自分の国、自分の住む地域から出られなくなっていく人々とインターネットを介して互いの状況をやりとりしながら、さながら森林や永久凍土から発生した巨神に世界が覆われていくような感覚を覚えた。
しかし、世界を覆う新型コロナウィルスが、これまでコロナウィルスの媒介者となったものや、人間の開発の犠牲になったものの怒りや悲しみの権化であろうがあるまいが、私たち人間は抵抗をし、生活を続けなければならない。言われずともステイホームして制作するのみの私にできることはなにもなく、そのためにこの様を描くのも憚られたが、これまでに発生した疫病を史実として描き残した先人たちに触発されて、巨神新型コロナウィルス像を描いた。アマビエという私たちの小さな祈りを添えて。

《邂逅（ラトゥ・キドゥールとトヨタマヒメ）》と《ウガヤフキアエズの奪還》

《邂逅（ラトゥ・キドゥールとトヨタマヒメ）》

《邂逅》と《ウガヤフキアエズの奪還》は、ともにジャワで聞いた海の神ラトゥ・キドゥールの伝承と、ラトゥ・キドゥールの海中の居城の玄関口とされるパランクスモ海岸に取材し、ラトゥ・キドゥールとの関連が感じられた日本神話の海の神、トヨタマヒメの神話を交えて描いたものである。

ジョグジャカルタ滞在中、しばしばラトゥ・キドゥールやニャイ・ロロ・キドゥールなどと呼ばれる、ジャワ南海の精霊をめぐる話を聞く機会があった。ラトゥ・キドゥールはジャワの南の海に城を構える女王で、その侍女ニャイ・ロロ・キドゥールは、緑色の服を着て海岸にやってきた人を海中の住民とするべくさらうとされる。この南海の精霊たちの恐ろし気な印象は、南極大陸に至るまで島ひとつない広大なジャワ南海を渡って寄せてくる緑の荒波の音や姿から生まれたものであろうか。実際パランクスモ海岸やその隣のパラントリティス海岸では、毎年海難事故に遭う人が絶えないと聞いた。
そしてジャワの人々にとって、この神話は単なる幻想的な物語ではない。日頃朗らかなジャカルタの友人が深刻な顔で語って曰く――彼は日頃からジムで身体を鍛えている長身の男性なのだが――ある日うっかり緑色の服を着てジャワの南海に面する海岸へ行ってしまった。その後の晩、苦しくて目が覚めたので何事かと思って見ると、自分の首をぎりぎりと絞める腕があった。必死に見極めるとその腕に鱗が認められたため、彼は即座にラトゥ・キドゥールの怒りに触れたと思ったという。また、ジャワ五曜のクリウォンにあたる金曜日の日没近くにパランクスモ海岸を訪ねると、祈祷ののち海に果物やお金、花弁などの供物を流す人々、その供物を拾い上げる地元の人々、腕を上げたり胡坐をかいたりして水平線を眺める人々が集まっていて、日が暮れたあともこうした人々が供えた線香が砂浜で赤く光っていた。パランクスモでプラスチックごみの削減とリサイクル活動をするアーティストに彼らは何者なのか聞いたところ、曰く、ジョグジャカルタ特別州の外から、病やDV や家族関係のもつれなど、深刻な悩みを抱えた人々がラトゥ・キドゥールの霊力を頼って集まってくるとのことだった。

現代でも人々から畏れられるラトゥ・キドゥールは、イスラム・マタラム王朝とも深いつながりを持つ。マタラム王朝とその流れを汲む王宮の歴代の王は、精神世界面の権威を裏付けるため、ラトゥ・キドゥールと霊的な婚姻関係にあるとされてきた。『ジャワ年代記』によれば、初代王セノパティ（在位 1587-1601）はラトゥ・キドゥールの海中の居城で三日三晩を過ごし、セノパティのアッラーへの祈願の威力が起こす天変地異に驚嘆したラトゥから、すべての人間と精霊を統べる者がわきまえておくべき知識を授かる。現ジョグジャカルタ王宮の先代スルタンであるハメンクブウォノ[1]九世（1912-1988）の運転手もまた、王の指示に従って車のままパランクスモ海岸から海中に入り、その居城でひとときを過ごして再び地上へ帰ってきたときの経験を語ったと聞いた。

どこか日本の浦島太郎の昔話を思わせる説話だが、その背景にはイスラムの男王が土着の精霊の女王を制したことを示したいとの意図があったようだ。

浦島太郎が乙姫の住まう海中の竜宮城を訪ねる昔話は、同様にホオリ（ほかにヒコホホデミ、山幸彦とも）がトヨタマヒメの住まう海神（わだつみ）の鱗（いろこ）の宮を訪ねる記紀神話の類話と考えられる。

トヨタマヒメの神話において、三年間滞在した海神（わだつみ）の鱗（いろこ）の宮から故郷の地上へ帰る折、ホオリはトヨタマヒメから妊娠

《ウガヤフキアエズの奪還》

を告げられる。お産のため浜へやってきたトヨタマヒメのため、ホオリはトヨタマヒメから頼まれたとおり、屋根を鵜の羽根で葺いた産屋を建て始める。ところが屋根を葺き終わらないうちに産気づいたトヨタマヒメは、ホオリに「お産の最中に私の姿を見てはならない。異界のものは本来の姿で子を産むものだから」と告げ、産屋に籠った。お産に臨んだトヨタマヒメの上げる凄まじい声に驚いたのであろうか、ホオリはヒメの警告に反して、産屋の中を覗いてしまう。そこにいたのは、のたうちまわる巨大な鰐（わに）だった。本性を見られたトヨタマヒメは激怒し、生まれた子を置いて海へ帰ってしまう。この子は誕生の状況にちなんでウガヤフキアエズと名付けられ、のちに養育のためトヨタマヒメから遣わされたヒメの妹、タマヨリヒメと結婚する。

どういうわけか、私にはこのタマヨリヒメがトヨタマヒメと名前違いの同一人物、他人のふりをして我が子を取り戻しに来た同じ魂のように思えてならなかった。そしてジャワのラトゥ・キドゥールの腕に鱗があったとの友人の話から、ラトゥ・キドゥールと本性が八尋鰐（やひろわに）であるトヨタマヒメとが、ふいに結びついた。

記紀神話に、ワニサメ論争というものがある。因幡の白兎が騙した「鰐」は、文字通りワニなのか、それとも日本にも生息し、ワニのように大きく獰猛な水棲生物であるサメなのか、という議論である。答えは永遠に分かりそうもないし、私にはどちらでも構わない。ただ、因幡の白兎の神話は東南アジアで語られているワニを騙すマメジカの民話に由来する、との説を考えると、南から北へ海を渡るマメジカがウサギへ、その足元のワニがサメへと変化していく様子が思い浮かんだ[2]。そして次第にこの光景は、北上するにつれてワニからサメへと変化する海の精霊の尾のイメージへと繋がっていった。

ラトゥ・キドゥールやトヨタマヒメ、トヨタマヒメの神話と共通性のある浦島太郎の物語が示すように、海は神々や精霊が住まう異界であり、あの世の性質を持つ。また現実世界の目で見ても、ラトゥ・キドゥールと縁の深いジョグジャカルタには、日本の都市が失った人と人との繋がりや、見えないものを畏れる姿勢が未だ濃厚に存在している。そうした日本とインドネシアの差は、双方の国で生活し、子育てを経験した方からお話を伺うと、ことさら際立って聞こえた。

マメジカが北上して素兎（しろうさぎ）となったように、ラトゥ・キドゥールのような荒々しい海の精霊が日本でトヨタマヒメとなったとしたら。そして普くものを統べようとする男性など構うことなく、出産後タマヨリヒメと名乗って我が子の奪還に来たとしたら。こうした光景を描いたのが《ウガヤフキアエズの奪還》であり、どこか類似点の感じられる二柱の海の神を、異国で各々別人格となっていた同じ魂の再会として描いたのが《邂逅（ラトゥ・キドゥールとトヨタマヒメ）》である。

1 ハメンクブウォノ九世は日本軍と交渉して灌漑を造らせ、インドネシア独立を支援しただけでなく、ジャワ哲学の体現者として今も人気が高い。80 年代に大規模な鼠害が起きた際も、このラトゥ・キドゥールの怒りを鎮めるためにパランクスモで影絵芝居を上演させたという。《ウガヤフキアエズの奪還》の下部にネズミがいるのは、この出来事による。
2 これは 2019 年にシンガポールのミヅマギャラリーで展示した小品で描いた。